

<文化財の種類 有形文化財（考古資料）

名 称	すえむらかまあとぐん ていーじー ごうよう しゅつどひん 陶邑窯跡群（TG231・232号窯）出土品
員 数	87点（TG231号窯：須恵器12点、軟質系土器4点、土製品1点 TG232号窯：須恵器65点、軟質系土器1点、土製品1点、窯道具3点）
所在地	堺市南区竹城台三丁2-1-4 （大阪府教育庁文化財調査事務所） 堺市堺区百舌鳥夕雲町二丁 （堺市博物館）
所有者	大阪府
年 代	古墳時代中期
説 明	<p>○出土遺跡の概要</p> <p>TG231・232号窯は、堺市・和泉市・大阪狭山市にまたがって展開する陶邑窯跡群<sup>すえむらかまあとぐん</sup>に属し、古墳時代中期に主として須恵器を焼成した窯跡である（図1～3）。両窯は近畿自動車道松原・すさみ線の建設に先立ち、平成2～3年（1990～1991）度に財団法人大阪府埋蔵文化財協会により実施された大庭寺遺跡<sup>おぼてら</sup>の発掘調査により検出された。</p> <p>両窯を含む大庭寺遺跡は、堺市南区大庭寺・小代に所在し、台地の緩傾斜面に位置する古墳時代中期以降の複合遺跡である。同調査の発掘調査報告書は、1995・1996年に刊行されている（大阪府教育委員会・大阪府埋蔵文化財協会 1995、大阪府教育委員会・大阪府文化財調査研究センター1996）。発掘調査では台地を開析する複数の谷地形を検出し（図4）、この谷地形の斜面で2か所の灰原が検出され、多量の焼成失敗品が出土した。灰原は2基の窯に伴うものと考えられ、想定される窯はTG231・232号窯と名付けられた。出土品の内容は、須恵器<sup>すえき</sup>が大多数を占め、軟質系土器、土製品、窯道具が少量伴っている。土器類の型式的特徴から現状では陶邑窯跡群の最初期に位置付けられており、実年代は4世紀末～5世紀前葉と考えられる。</p> <p>当窯跡が属する陶邑窯跡群は、古墳時代中期から平安時代にかけて主として須恵器を焼成した日本最大の窯跡群であり、現在までに800基を超える窯跡が把握されている。窯跡群は地形により8つの地区に分けられ、TG231・232号窯は石津川と和田川に挟まれた<sup>とが</sup>（TG）地区に属し、丘陵の裾部に立地する。なお、陶邑窯跡群出土資料のうちTG231・232号両窯に後続する資料の一部は、わが国の窯業研究の基準資料としてその学術的価値が評価され、平成17年6月9日に「大阪府陶邑窯跡群出土品」として国の重要文化財に指定されている<sup>1</sup>。</p>

### ○出土状況（図5・6・8）

発掘調査では、丘陵部と複数の谷を検出した。このうち、谷の2か所において、2基の窯に伴うとみられる灰原を検出し、南側の灰原がTG231号窯灰原、北側の灰原がTG232号窯灰原と命名とされた。後世の削平により窯体は2基とも失われていた。

TG231号窯の灰原の規模は、最大幅約10m、最大長約5mで、最大厚は約50cmであった。灰原の堆積層は3層に大別され、このうち上位の2層から遺物が多く出土した。灰原の各層から出土した遺物には接合するものもある。TG232号窯灰原の規模は、最大幅約16m、最大長約6.5mで、最大厚は約50cmであった。灰原は上下に2分でき、下層で大型破片が多く出土した。また6世紀末頃の窯(TG233号窯)に伴う灰原が上部を覆っていた。発掘調査後の整理作業の過程で、TG231・232号両窯の灰原から出土した資料には、接合するものがあることが判明している。

以下では、指定品の概要について述べる。なお指定品は、TG231・232号窯で焼成されたと特定でき、かつ両窯の特徴を示す資料とした。

### ○TG231号窯灰原出土資料の概要（図6・7・10、表1）

TG231号窯灰原からは、整理用のコンテナで約350箱の資料が出土した。発掘調査報告書には216点が掲載されており、その中から本窯の特徴をよく示す16個体（17点）を指定する。器種には鉢・把手付椀・脚付有蓋鉢・蓋・高杯・小型壺（甗を含む）・器台・壺・大型甕などがある。比率では大型甕がもっとも多く、当窯の主要な製品であったことがわかる。

- ・蓋（1）：相対的に器高が低く、口径が大きい。天井部には列点文を巡らせる。
- ・有蓋高杯（2）：三角形の透かし穴を有する。TG232号窯では多窓透かしが比較的多く見られるが、当窯灰原資料には認められない。
- ・把手付椀（3）：体部に突線を有し、口縁端部が内折する。把手の断面は円形である。
- ・鉢（4）：瓦質に焼成され、2条の突線を有する。
- ・脚付有蓋鉢（5・6）：当窯灰原でのみ出土している。2点とも泪滴形の透かし穴を有するが、脚部の長さに違いがある。
- ・壺（7～11）：形態は多様で、直口のもの（7）と口縁部が外に開くもの（8・10）、短頸のもの（9）、受け口状のもの（11）などがある。
- ・大型甕（12）：口縁端部は外反する。口頸部外面にハケメを施す。
- ・軟質系土器（13～15）：平底鉢（13）、深鉢（14）、なべ（15）などがある。平底鉢は平行タタキ、深鉢は格子タタキを施す。鍋は瓦質に焼成され、把手を有する。
- ・土製品：陶製の無文当て具（16）が出土している。

### ○TG232号窯灰原出土資料の概要（図8・9・11・12、表2）

TG232号窯灰原からは、整理用のコンテナで1400箱の資料が出土した。TG231号窯灰原出土資料に比べ量が大きく、かつ残存率の高い資料が相対的に多く含まれる。発掘調査報告書には574点が掲載されており、その中から本窯の特徴をよく示す52個体（70点）を指定する。器種には杯・

鉢・把手付椀・蓋・高杯・小型壺（甗を含む）・器台・壺・大型甕などがあり、このうち大型甕がもっとも多い。TG231 号窯と器種構成を比較すると、杯は TG232 号窯灰原でのみ、脚付有蓋鉢は TG231 号窯灰原でのみ出土している。

- ・杯（1・2）：平底であり、後続する型式との系譜は捉えがたい。
- ・鉢（3）：平底である。調整は回転ナデののち、底部に静止ヘラケズリを施す。
- ・把手付椀（4・5）：のちの型式に比べ、器高が高い傾向にある。把手の断面は円形のものと同様のものがある。底部はヘラケズリののちにナデ調整を加える。後続型式ではヘラケズリのみであり、当窯の製品が相対的に丁寧に製作されていることを示す。
- ・蓋（6～10）：高杯に伴うものがほとんどだが、壺に伴うと考えられるもの（9・10）もある。体部の突帯や摘みの形状といった形態的特徴、及び刺突文や沈線を施す装飾技法において、陶質土器<sup>とうしつど</sup>との類似点が多い。
- ・有蓋高杯（11～16）：透かし穴の形状、脚部上部の段、杯部の器壁の厚さといった諸特徴において、陶質土器との共通点が多い。
- ・無蓋高杯（17～27）：有蓋高杯に比べ形態のバリエーションが多く、土師器との類似性が認められるもの（27）もある。透かしの形状には、円形（17～19・22）、三角形（20・21）、泪滴形（23）、線状（24）、窓状（25）の各種がある。22 は脚部に貫通しない菱形文を施す。
- ・小型壺（28～30）：甗（28・29）や直口壺（30）がある。甗は後の型式に連続する形態である。
- ・器台（31～37）：小型器台（31）、筒形器台（32）、高杯形器台（33～37）がある。高杯形器台は、装飾（鋸歯文・格子文・波状文・組紐文・山形文）、透かしの形態（短冊形・三角形の透かしを千鳥状に配置）などの点で陶質土器との共通点が多い。文様は個体により精粗の差が大きい。
- ・壺（38～43）：報告書での区分に倣い、便宜上、口径 30 cm 以下のものを壺、それ以上のものを大型甕とする。形態は多様だが、後続する型式にはみられない、頸部中央に突帯を施すもの（39・40）が特徴的である。螺旋状沈線を施すもの（39）もあり、これらは陶質土器に認められる特徴である。成形技法では、後続資料に比べ縄蓆タタキを施すもの（38・39）が相対的に多い。内面の当て具痕跡は磨り消されるものが多いが、無文当て具、同心円当て具の痕跡を残す資料もある。
- ・大型甕（44～47）：当窯でもっとも多く焼成された器種であり、600 個体以上が灰原に投棄された。容量は約 480L と計算されている。口頸部が直立するもの（44）が特徴的であるが、口縁部を外反させない直口のもの（46）もある。外面のタタキ目はすり消されるものが多いが、平行タタキ、縄蓆タタキ、格子タタキの痕跡を残すものもある。壺と同様に多くの資料で内面の当て具痕を磨り消すが、無文・同心円文当て具の痕跡を残すものもある。

成形技法については、底部の絞り技法（47）が特徴的で、陶質土器との関連性が窺われる。いっぽう、楡状工具により外面の頸部付近に施されるハケ調整（44）には、土師器との関連が推定される。焼成前の破損を繕うための補修痕が認められる資料（45・46）もある。

- ・軟質系土器（48）：平底鉢・長胴甕・埴<sup>こしき</sup>甗（48）などがある。酸化焰で軟質に焼成されるものと、瓦質<sup>がしつ</sup>に焼成されるものがある。調理具であっても被熱痕などの使用痕を留めないため、須恵器とともに当窯で焼成されたものと評価される。

- ・土製品 (49) : 準構造船を象った資料があり、還元焰で硬質に焼成されている。
- ・窯道具 (50~52) : 輪トチン状の窯道具 (50・51) と、角状の窯道具 (52) がある。(52) は片面に自然釉が付着し、窯内での使用方法が推測できる。

## ○評価

上記のように、TG231・232号窯灰原から出土した資料は、形態・技法ともに朝鮮半島で製作された陶質土器との類似点が多く、後続する窯における在地化が進んだ資料とは一線を画している。こうした揺籃期に属する資料は800基以上からなる陶邑窯跡群のなかでもごくわずかであり、陶邑窯跡群開窯当初の様相を評価するうえで重要な資料である。また同時に、日本における窯業生産の端緒であり、須恵器生産開始当初の様相を知るうえでも良好な資料といえる。

須恵器は生産地が限定されるために、特定の産地の資料が広域に流通した。かつ、技術管理を伴う大量生産が継続的に行われ、明瞭かつ継起的な形態変化が看取される。そのため、古墳時代中期における考古資料を評価するにあたって、年代の指標としての有用性が極めて高い。また、朝鮮半島との人・モノ・情報の往来、王権による産業編成、さらには王権の成熟度等を示す資料である。これらの諸点は、古墳時代における大阪府域の歴史を明らかにするうえで欠くことのできないものであり、ひいては日本史のみならず、当該期における古代東アジア社会の様相を捉えることのできる資料として高く評価されるべきである。総じて、本資料は大阪府指定文化財としてふさわしいものと評価できる。

(註1) 大阪府陶邑窯跡群出土品の指定にあたっては、大阪府教育委員会刊行の報告書『陶邑』Ⅰ～Ⅷに収録され、すでに評価の定まった資料を対象としたため、TG231・232号窯出土品は対象外となった。

(註2) 還元焰で高火度焼成された陶器のうち、朝鮮半島で製作されたものを陶質土器、日本で製作されたものを須恵器とする。肉眼観察では判別しがたいものもあるが、蛍光X線を用いた土器胎土の理化学的分析により、それぞれの産地推定が可能となっている。

## [参考文献]

植野浩三「古墳時代中期の手工業生産と政治秩序－須恵器生産の展開を中心にして－」『文化財学論集』文化財学論集刊行会 1994

大阪府教育委員会・財団法人 大阪府埋蔵文化財協会『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第90輯 1995

大阪府教育委員会・財団法人 大阪府文化財調査研究センター『陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第10集 1996

大阪府立近つ飛鳥博物館 『年代のものさし－陶邑の須恵器－』2006

菱田哲郎『古代日本 国家形成の考古学』京都大学学術出版会 2007

岡戸哲紀「大庭寺TG231・232号窯、茄子作遺跡出土の初期須恵器」『地域発表及び初期須恵器窯の諸様相』大阪朝鮮考古学研究会 2010

三辻利一・中村 浩・犬木 努「陶邑産須恵器の列島各地への広域供給－素材粘土の化学特性の分析から－」『志学台考古 第16号』大阪大谷大学歴史文化学科 2016

中久保辰夫『日本古代国家の形成過程と対外交渉』大阪大学出版会 2017

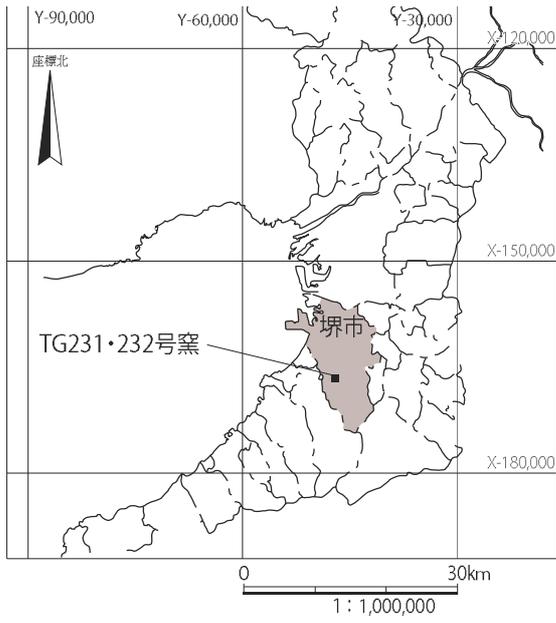


図1 TG231・232号窯の位置

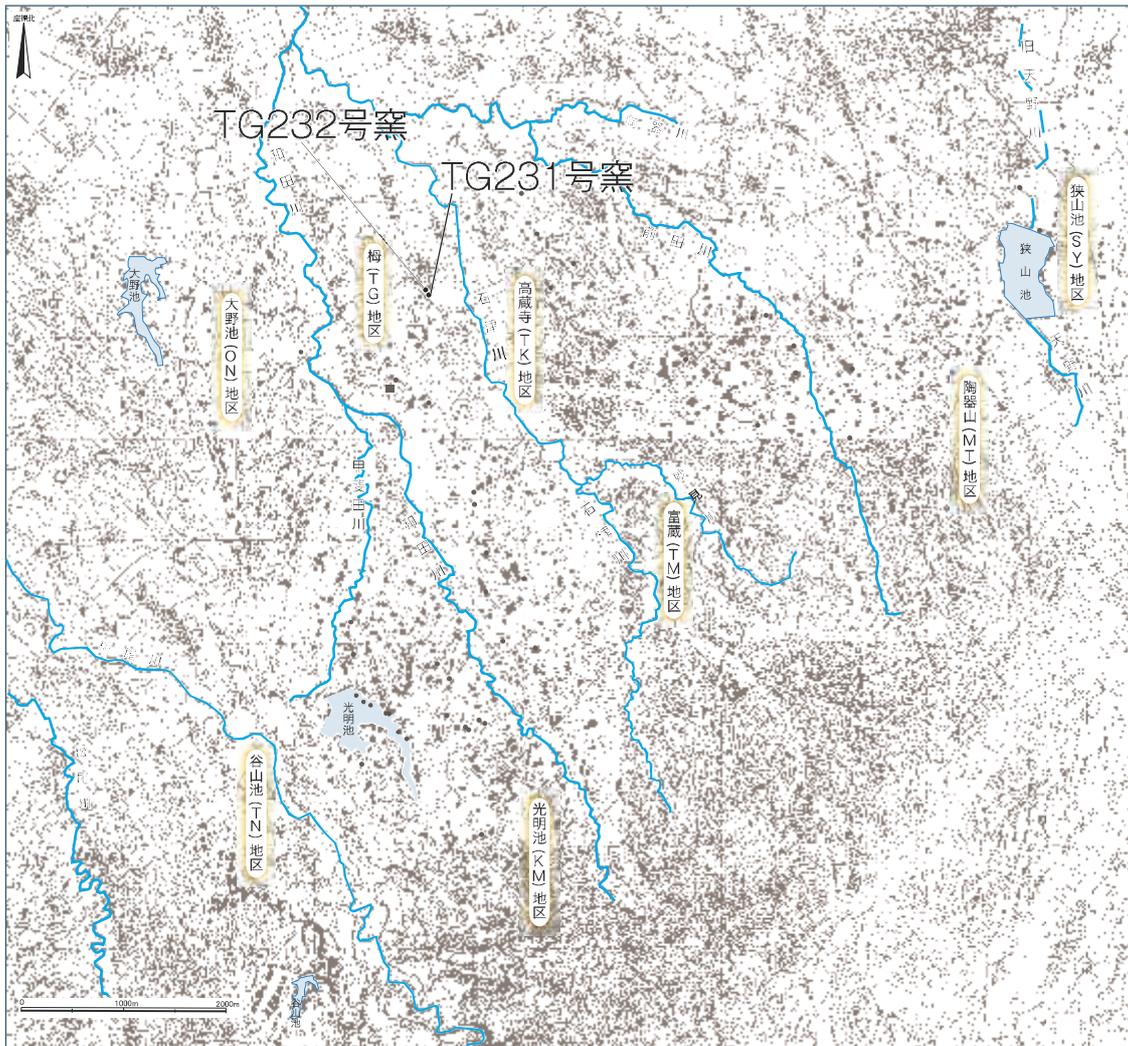
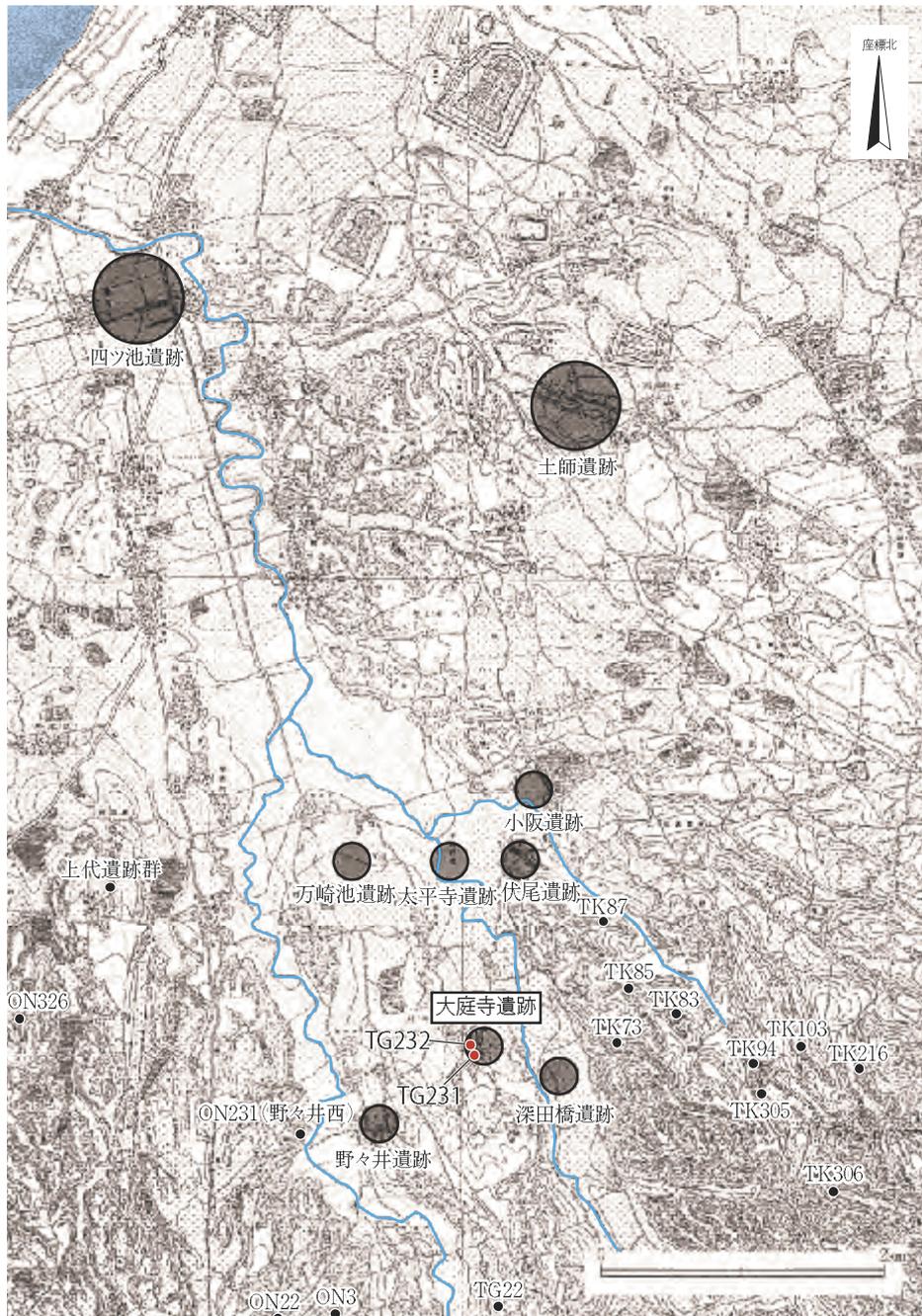


図2 陶邑窯跡群における窯跡の分布([大阪府立近つ飛鳥博物館2006]所収図より作成)



時期	集落名	大庭寺	万崎池	小阪	伏尾	深田	野々井	豊田	集落の特徴
出現期	TG232	■	■						・渡来系集団を中心とした工人集落の出現。
発展期	ON231	■		■					・渡来系集団と倭系集団が混在した工人集落の出現。
	TK73				■		■		
完成期	TK216	■		■	■	■	■		・掘立柱建物を中心として構成される大規模集落の出現。 ・古墳の築造。 ・泉北丘陵に展開する在地有力集団の須恵器生産への積極的な関与。
	TK208				■	■	■		
	TK23						■	■	

図3 TG231・232号寮周辺の関連遺跡

([大阪府教委・大阪府埋蔵文化財協会1995、岡戸2010]より一部改変して引用)

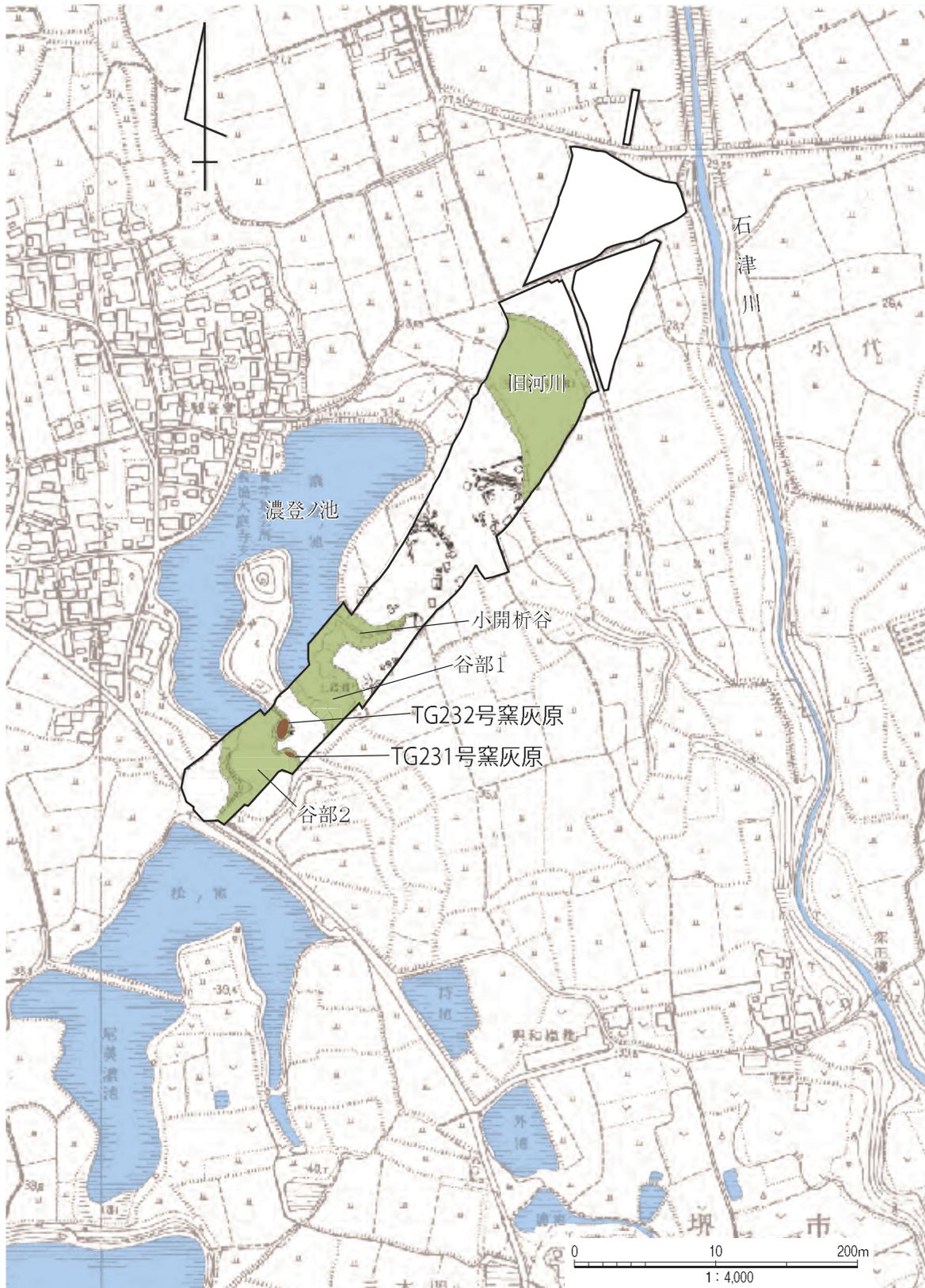
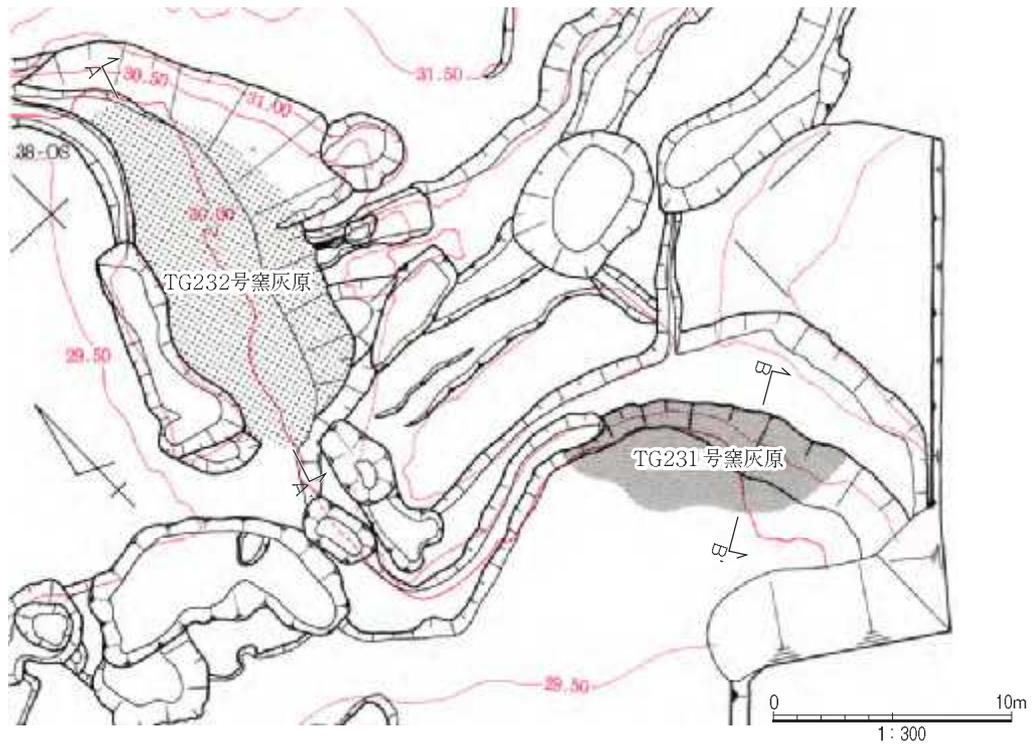
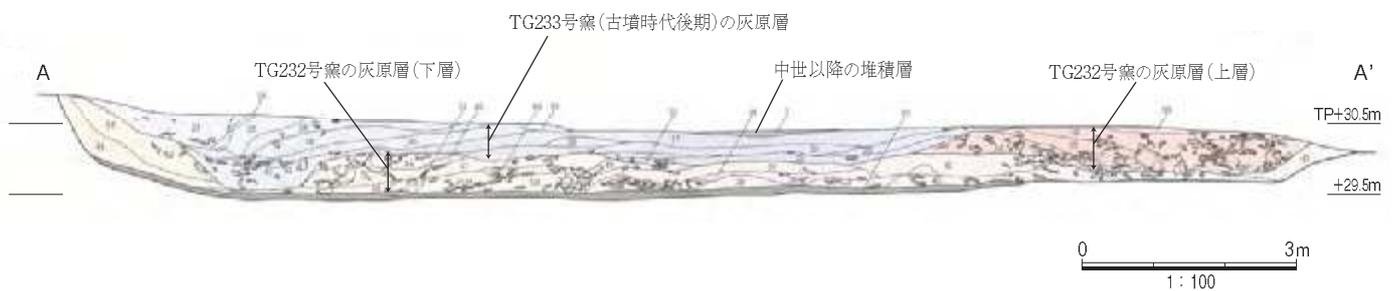


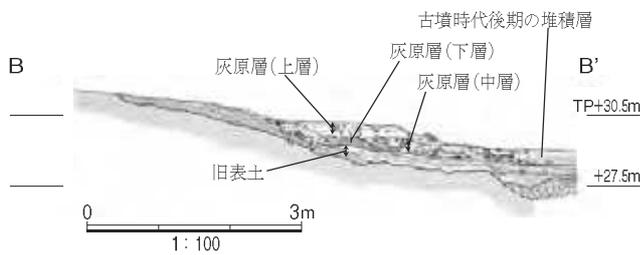
図4 大庭寺遺跡の調査地と周辺の地形、TG231・232号窯灰原の検出位置  
 ([大阪府教委・大阪府埋蔵文化財協会1995、大阪府教委・大阪府文化財調査研究センター1996]より作成)



TG231・232号窯灰原平面図



TG232号窯灰原断面図



TG231号窯灰原断面図

図5 TG231・232号窯灰原の平面図及び断面図

([大阪府教委・大阪府埋蔵文化財協会1995、大阪府教委・大阪府文化財調査研究センター1996]より一部改変して引用)



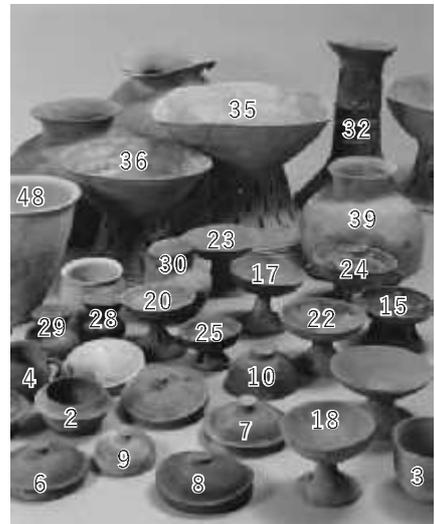
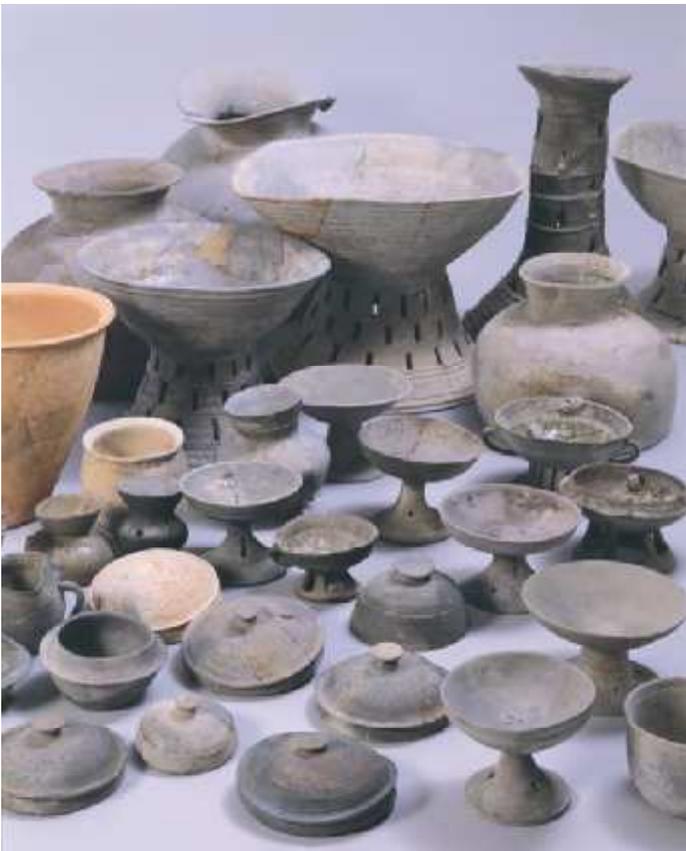
図6 TG231号窯跡 灰原全景(西から) (提供：公益財団法人 大阪府文化財センター)



図7 TG231号窯跡 灰原出土資料  
(指定品には図12と対応した番号を付番) (提供：大阪府立近つ飛鳥博物館)



図8 TG232号窯跡 灰原全景(西から) (提供：公益財団法人 大阪府文化財センター)



(指定品には図10・11と対応した  
番号を付番)

図9 TG232号窯跡 灰原出土資料  
(提供：公益財団法人 大阪府文化財センター)

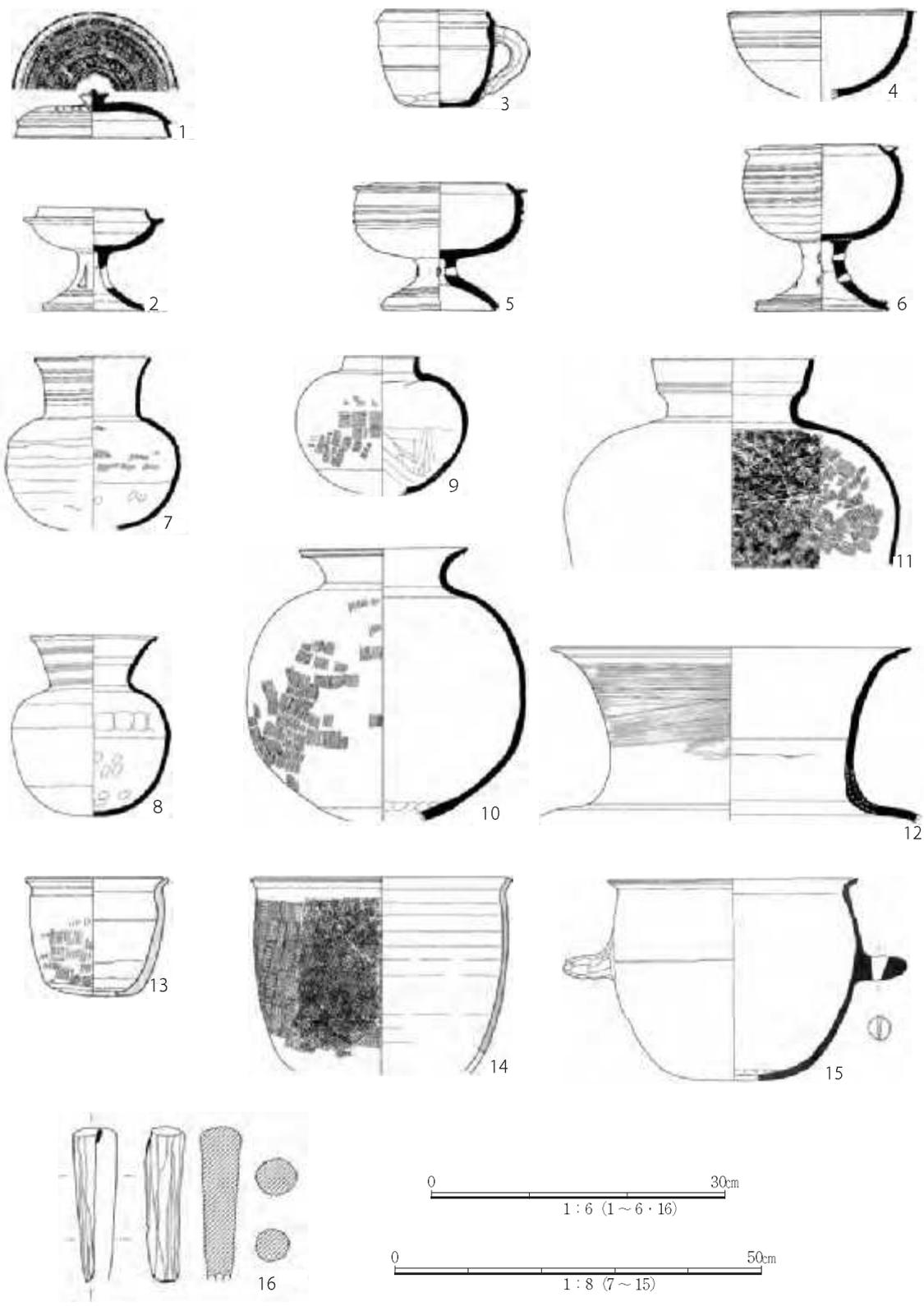


図10 TG231号窯灰原出土資料

([大阪府教委・大阪府文化財調査研究センター1996]より一部改変して引用)

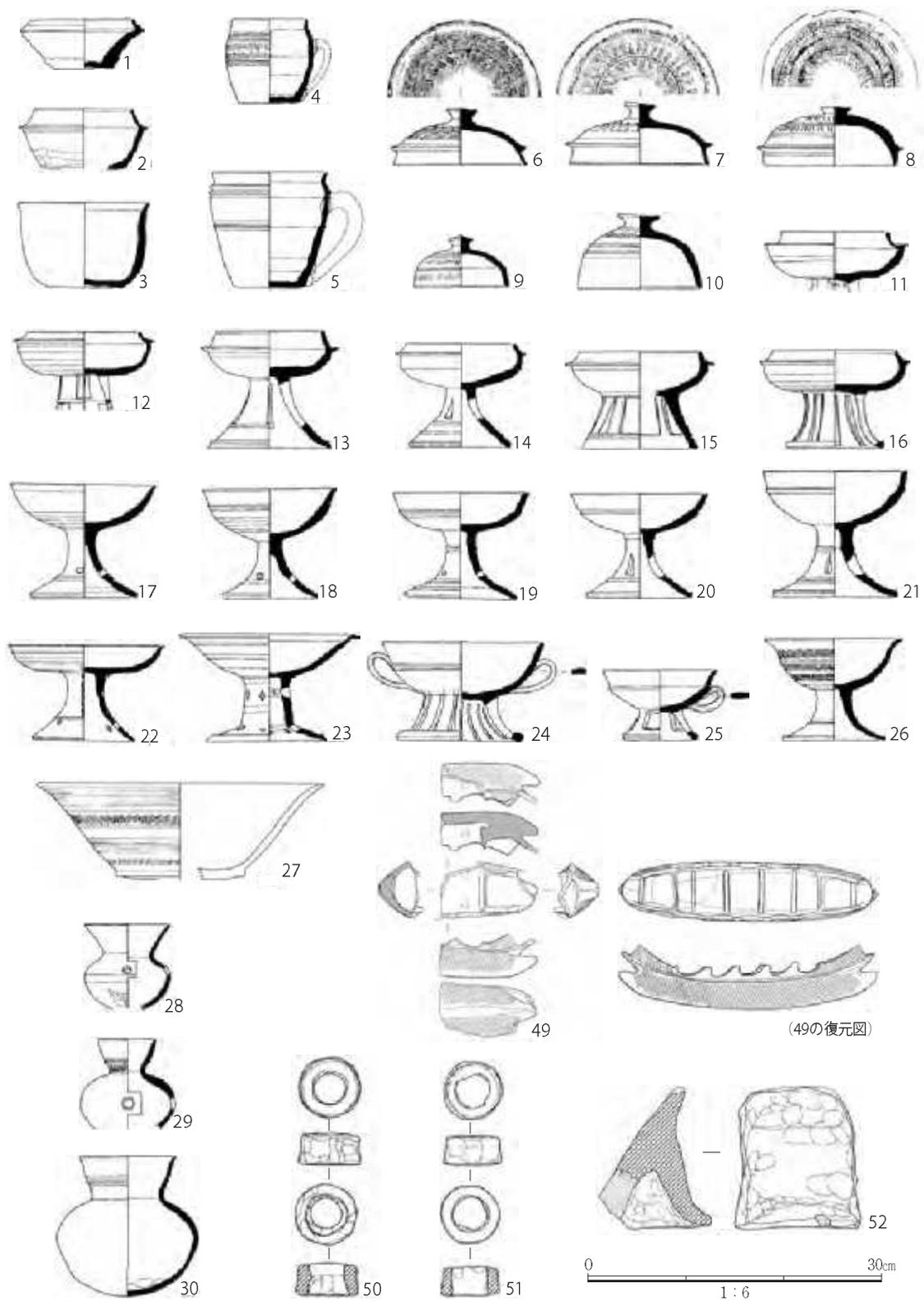


図11 TG232号窯灰原出土資料(1)  
 ([大阪府教委・大阪府埋蔵文化財協会1995]より一部改変して引用)

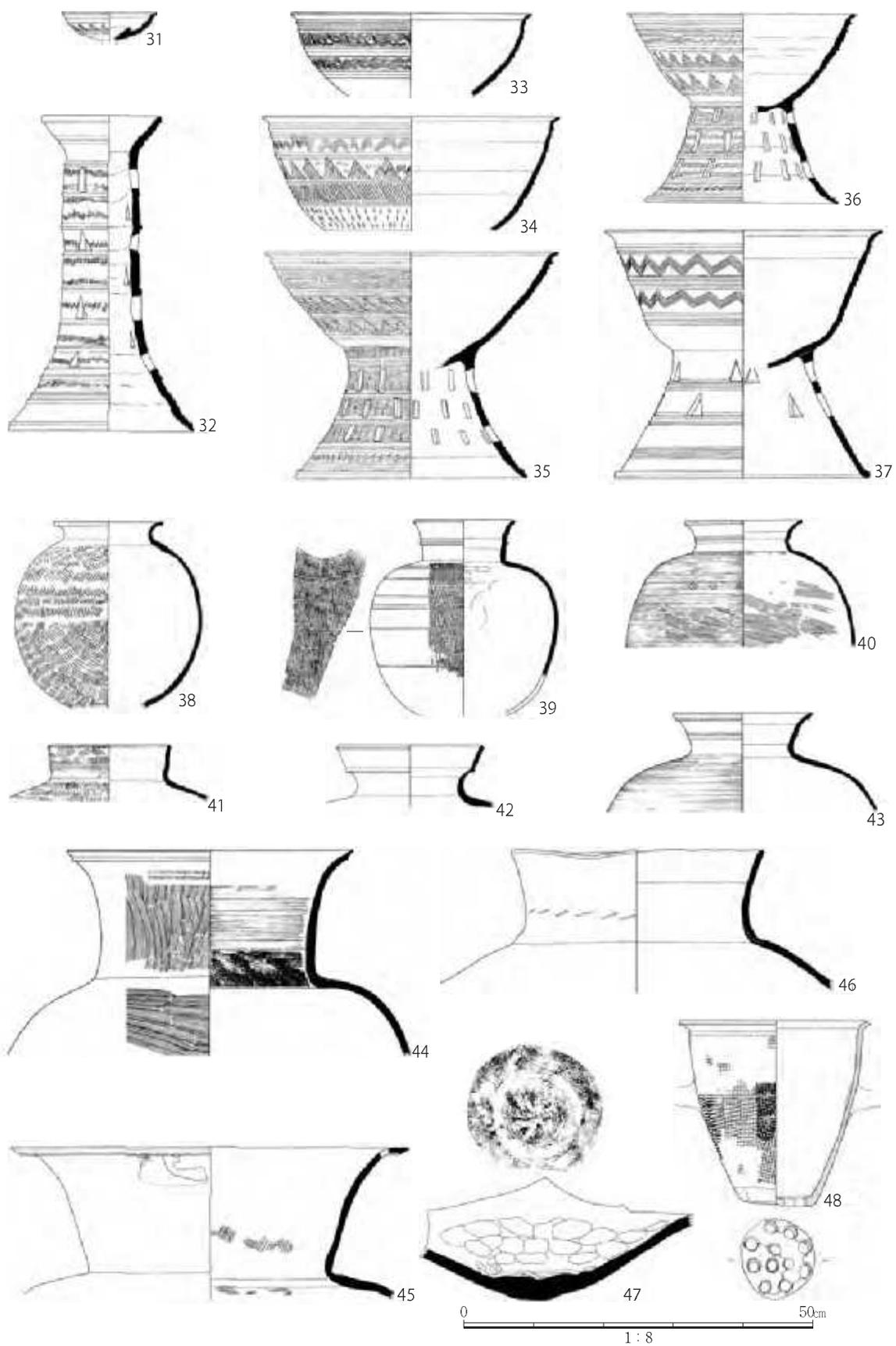


図12 TG232号窯灰原出土資料(2)

([大阪府教委・大阪府埋蔵文化財協会1995]より一部改変して引用)

表1 TG231号窯灰原出土資料一覧

番号	報告番号*	器種	口径*	器高*	最大径*	底部・高台径*	点数	焼成	残存・復元状況	備考
1	1252	蓋	15.7	5.0	15.8	-	1	堅緻	ほぼ完形	自然釉付着
2	1253	高杯	11.0	10.5	14.3	10.3	1	堅緻	全形を把握可能	
3	1245	把手付椀	10.4	10.0	12.2	6.5	1	堅緻	ほぼ完形	
4	1291	脚付鉢か	17.8	<u>9.2</u>	19.0	-	1	瓦質	下半を欠損	
5	1293	脚付有蓋鉢	13.8	13.2	17.6	11.2	1	堅緻	全形を把握可能	透かし穴の形状は泪滴形。焼け歪んでいる。
6	1292	脚付有蓋鉢	18.5	17.1	20.2	13.4	1	堅緻	全形を把握可能	透かし穴の形状は泪滴形。脚部の焼成は甘い。
7	1319	壺	15.6	<u>23.7</u>	23.9	-	1	堅緻	ほぼ全形を把握可能	
8	1320	壺	17.3	24.8	21.7	-	1	堅緻	全形を把握可能	
9	1370	壺	10.0	<u>19.1</u>	23.3	-	1	堅緻	ほぼ全形を把握可能	直口で短頸。
10	1356	壺	22.9	<u>37.2</u>	38.0	-	1	堅緻	ほぼ全形を把握可能	
11	1343	壺	21.8	<u>28.8</u>	45.7	-	1	堅緻	下半を欠損	口縁部は受け口状。大きく焼け歪む。
12	1398	大型甕	(48.6)	<u>23.9</u>	(51.8)	-	1	堅緻	口頸部のみ残存	
13	1431	平底鉢	18.7	16.2	19.5	12.2	1	軟質	全形を把握可能	軟質系土器
14	1445	深鉢	(34.3)	<u>24.5</u>	(35.4)	-	2	軟質	下部を欠損	軟質系土器
15	1449	埴	(36.0)	27.7	36.0	20.1	1	瓦質	全形を把握可能	軟質系土器。把手を有する。
16	1460	当て具	-	長さ <u>16.0</u>	4.5	-	1	堅緻	約半分を欠損	側面と当て面がやや摩滅している可能性。

小計 17 点

表2 TG232号窯灰原出土資料一覧

番号	報告番号*	器種	口径*	器高*	最大径*	底部・高台径*	点数	焼成	残存・復元状況	備考
1	486	杯	10.5	5.1	12.5	6.0	1	堅緻	全形を把握可能	
2	488	杯	9.7	6.2	13.1	8.4	1	堅緻	全形を把握可能	
3	497	鉢	12.8	8.7	13.3	7.6	1	堅緻	ほぼ完形	
4	494	把手付椀	(7.5)	8.6	8.9	6.1	1	堅緻	把手を欠損	
5	496	把手付椀	11.6	11.9	12.4	7.1	1	堅緻	把手を欠損	把手付椀としては大型。焼け歪みあり。
6	501	蓋	13.4	5.8	13.8	-	1	堅緻	ほぼ完形	
7	502	蓋	14.0	6.3	14.9	-	1	堅緻	全形を把握可能	
8	512	蓋	13.1	6.0	14.9	-	1	堅緻	全形を把握可能	歪みあり
9	514	蓋	9.5	5.3	9.8	-	1	堅緻	全形を把握可能	小型の蓋
10	515	蓋	12.4	7.6	12.7	-	1	堅緻	全形を把握可能	内面に自然釉付着
11	518	有蓋高杯	(11.0)	4.0	15.7	-	1	堅緻	脚部を欠損	
12	520	有蓋高杯	(11.4)	<u>8.0</u>	14.3	-	1	堅緻	脚部下半を欠損	大きく焼け歪む
13	519	有蓋高杯	(10.9)	12.2	16.0	13.4	1	堅緻	全形を把握可能	大きく焼け歪む
14	521	有蓋高杯	11.0	<u>(10.6)</u>	13.2	(9.9)	1	堅緻	全形を把握可能	大きく焼け歪む
15	516	有蓋高杯	12.3	10.1	16.0	11.6	1	堅緻	全形を把握可能	内面に自然釉及び窯滓付着
16	517	有蓋高杯	12.5	10.1	16.5	(9.6)	1	堅緻	全形を把握可能	大きく焼け歪む
17	530	無蓋高杯	14.5	11.7	14.7	10.5	1	堅緻	全形を把握可能	内面に自然釉付着
18	531	無蓋高杯	13.2	11.3	13.2	9.6	1	堅緻	全形を把握可能	
19	533	無蓋高杯	13.5	10.9	13.8	10.9	1	堅緻	全形を把握可能	
20	534	無蓋高杯	13.6	10.7	13.9	10.4	1	堅緻	全形を把握可能	

番号	報告番号*	器種	口径*	器高*	最大径*	底部・高台径*	点数	焼成	残存・復元状況	備考
21	532	無蓋高杯	14.7	13.0	14.6	12.5	1	堅緻	全形を把握可能	
22	535	無蓋高杯	15.9	<u>9.9</u>	15.9	10.1	1	堅緻	全形を把握可能	直列菱形文
23	536	無蓋高杯	17.1	10.9	18.2	12.1	1	堅緻	全形を把握可能	透かし穴は泪滴形。
24	538	無蓋高杯	16.1	10.2	16.3	12.3	1	堅緻	ほぼ完形	内面に自然釉及び窯滓
25	570	無蓋高杯	11.3	<u>7.3</u>	11.6	7.0	1	堅緻	全形を把握可能	波状文/把手を有する
26	539	無蓋高杯	(13.7)	10.4	14.0	10.1	1	堅緻	全形を把握可能	
27	578	無蓋高杯	(28.7)	<u>9.8</u>	(29.2)	-	3	軟質	脚部を欠損	波状文
28	628	罎	8.5	8.8	8.5	-	1	堅緻	底部を欠損	
29	629	罎	(5.7)	9.2	9.8	-	1	堅緻	底部を欠損	波状文
30	636	小型壺	9.5	14.4	14.4	-	1	堅緻	全形を把握可能	
31	568	小型器台	13.0	<u>4.0</u>	13.4	-	1	堅緻	脚部を欠損	鋸歯文
32	690	筒形器台	16.4	45.6	26.6	26.3	1	堅緻	全形を把握可能	文様は波状文、透かし穴は三角形。
33	711	高杯形器台	33.9	<u>12.0</u>	34.4	-	3	堅緻	下半部を欠損	文様は組紐文。
34	694	高杯形器台	41.5	<u>16.4</u>	41.5	-	1	堅緻	下半部を欠損	文様は波状文/鋸歯文/斜格子文/列点文
35	706	高杯形器台	41.4	32.6	42.0	32.8	1	堅緻	全形を把握可能	文様は波状文/鋸歯文/刺突文。透かし穴は長方形。
36	708	高杯形器台	32.4	27.4	32.8	27.4	1	堅緻	全形を把握可能	高杯形器台としては小型。文様は波状文/鋸歯文。透かし穴長方形。
37	716	高杯形器台	39.4	<u>35.7</u>	(39.7)	35.9	13	堅緻	全形を把握可能	文様は山形文。透かし穴は三角形。
38	850	壺	15.6	<u>27.1</u>	26.8	-	1	堅緻	底部を欠損	縄蓆タタキののち、一部を磨消し
39	749	壺	14.0	<u>22.7</u>	26.9	-	1	堅緻	下半部を欠損	縄蓆タタキの上に螺旋状沈線を巡らせる。
40	772	壺	16.7	<u>18.2</u>	(32.7)	-	1	堅緻	下半部を欠損	体部外面にカキメ、内面にハケ調整。
41	867	壺	16.7	<u>8.0</u>	28.4	-	1	堅緻	肩部以上のみ残存	直口。外面平行タタキ。
42	797	壺	20.2	<u>8.9</u>	(23.9)	-	1	堅緻	肩部以上のみ残存	二重口縁。窯滓付着。
43	792	壺	(19.5)	<u>14.4</u>	(38.8)	-	1	堅緻	下半部を欠損	体部外面にカキメ
44	882	大型甕	40.4	<u>29.5</u>	(57.8)	-	1	堅緻	肩部以上のみ残存	外面にハケメ、内面にカキメ。
45	907	大型甕	55.7	<u>22.2</u>	(56.8)	-	3	堅緻	肩部以上のみ残存	3か所に補修痕あり。
46	1023	大型甕	35.7	<u>20.5</u>	(56.1)	-	1	堅緻	肩部以上のみ残存	直口。補修痕あり。
47	1024	大型甕	-	(17.9)	(30.5)	-	1	堅緻	底部のみ残存	絞り痕あり
48	1049	甗	26.9	26.5	<u>27.4</u>	9.2	1	軟質	ほぼ全形を把握可能	軟質系土器。把手欠損。
49	484	船形土器	長さ <u>9.9</u>	高さ <u>4.5</u>	二	-	1	堅緻	約1/3が残存	
50	1050	窯道具	-	3.3	6.4	-	1	堅緻	完形品	
51	1051	窯道具	-	3.0	5.9	-	1	堅緻	完形品	
52	1054	焼台	-	14.6	(幅)13.0	-	1	堅緻	全形を把握可能	片面に自然釉付着

小計 70 点

(※)

- ・報告番号は、TG231号窯については(大阪府教育委員会・財団法人 大阪府文化財調査研究センター1996)、TG232号窯については(大阪府教育委員会・財団法人 大阪府埋蔵文化財協会1995)での掲載番号である。
- ・単位はcm。括弧内の数値は復元径。残存率が1/2以下の場合には復元径としている。
- 下線付きの数値は残存する最大長・径。